

# 患者としつかり向き合う医療はどこへ行つたのか？ ミャンマー医療支援を通して日本の医師の原点回帰を

（NPOミャンマーファミリー・クリニックと菜園の会（MFCG）代表で医師の名知仁子さんは、「ソーシャル・ビジネス・グランプリ2012夏」（社会起業大学主催）においてグランプリを獲得し、後援した生涯学習開発財団から事業支援金が授与された。

その事業計画は、ミャンマー農村部における医療、衛生、栄養の改善支援を展開するとともに、活動に参加する日本の若手医師の意識改革を通して、日本の医療現場の原点回帰、医療モラルの向上を図るのが目的だ。ミャンマーだけでなく日本の医療問題解決にもつながる点が、社会事業として大きく評価された。

## 聴診器1つで何ができるか

名知さんは獨協医大を卒業後、内科医として日本医大に入った。最先端の医局ですごく勉強になったと同時に、女性やマイナー医大出身者の地位格差など、医療そのものとは関係ない歪んだ日本の医

療現場の姿が目についた。患者の立場でも、大病院で2時間待つて問診3分、あとは薬を渡されるだけという、悲しい思いを体験した人も多いはずだ。

病気を診て患者を診ない日本の医療に疑問を持ったところ出会ったのが「もし、あなたの愛を誰かに与えたら、それは、あなたを豊かにする」という、マザー・テレサの言葉だった。それをきっかけに退職し、2002年、国際緊急医療支援

団体に参加。ミャンマー難民キャンプや災害被害地などの医療活動に携わった。ミャンマーではレントゲンさえない中、現地医師が自らの経験と患者の様子



移動クリニックで診察中の名知さん



ヤンゴン近郊の村の学校を訪問

名知さんは国際医療に参加する直前、原因不明の大病で4か月をベッドで過ごし、「なぜ今？なぜ私？」と絶望を味わった。3年前には乳がんが発見され治療継続中。それでも名知さんは、前を向いて楽しそうに言う。「人生はデコレーションケーキとかすみ草。ケーキに何を塗るかは自分次第。そしてかすみ草からばらばら落ちた種は、いろんな時期にいろんな芽の出方をする。好奇心さえ持っていれば、それは向こうからやってくるはず」

■ミャンマーファミリー・クリニックと菜園の会  
東京都荒川区東尾久8-41-23  
<http://myanmar-clinic.com>  
[myanmarfcg.info@gmail.com](mailto:myanmarfcg.info@gmail.com)

## 本当の医療に欠かせないこと

2008年からは、他団体と協力して少しずつMFCGの活動を開始した。主にマラリアや感染症の治療を目的とし、村々を巡回する移動クリニック。栄養補給や衛生教育などを目的とした拠点クリニック。それに付随した菜園づくりと農業指導。日本に住むミャンマー人たちの無料医療相談もしている。

日本の医療再生につながる医師派遣は、先端医療と離れるリスクや、キャリアとして評価されにくいなど、日本ではまだまだ壁があるが、活動に理解ある教授の教え子や、出身医大の学生らが手を挙げてくれている。患者を受け止めしっかりと向き合うことが、本当に必要な治療をする上で欠かせないのだという。

シリーズ

## 社会起業家

NPOミャンマーファミリー・クリニックと菜園の会 代表

# 名知仁子氏に聴く